

八木重吉における〈自然〉と〈こども〉

——目指した姿——

佐藤瑞帆

初めに

八木重吉は夭折の詩人である。二十九年の短い人生は、決して華々しいものではなかった。明治三十一年、旧東京府南多摩郡相原の農家に生まれた重吉は、幼少時代から勉強熱心で、成績優秀な模範児童であった。大人しい性格で体も小柄だったが、鎌倉師範学校時代のマラソン大会では、息も絶え絶えになりながらも、毎回最後までトップを譲らなかつたという。決して投げ出さず、何事も最後までやり抜く芯の強さを感じさせるこのエピソードからは、後の求道生活に繋がるストイックさが感じられる。加えて、教師時代の教え子からの「よく勉強するまじめな親切な青年教師だった」^①という評価や、後の妻となる登美子への熱烈な求愛の記録からも、強い探究心や一途な姿勢を感じ取ることができるだろう。何事も真摯に向き合い探求する姿勢は、信仰においてより強く発揮された。敬虔なクリスチャンとして亡くなるまで励み続けたその求道生活は、妻とみ子曰く、「いたいたしいまでに真剣」で、その信仰は「ピンと張りつめた弓弦のような、場合によっては狂気に近いような熱烈な」^②ものであったという。

熱心な求道生活に励んだ重吉の詩は、草野心平によって「日本の基督に関する詩は八木重吉のものをもって私は最高としたい」^③、「わが国のキリスト者の詩としてもっとも高い地点にあり、ことに晩年の純化された詩の美しさは独特で、こうした傾向のものとして類がない」^④などと評価されている。生前刊行された詩集や雑誌等に発表した詩には宗教に関わる直接的な表現はさほど見られないが、処女詩集『秋の瞳』（新潮社・大正十四・八）に見られる真善美の模

索と、そこに及ばざる自分自身への苦悩、そして第二詩集『貧しき信徒』（野菊社・昭和三・二）における死を目前にした生活の中での家族や神への悲痛な思いなど、どの詩篇からも求道的な姿勢が見て取れるのが印象的である。そのような、求道的な宗教者としての側面、一途になにかを追い求める姿勢は、短い詩作期間の中で残した二千篇を超す詩の中で「こうありたい」という願いや、自然や幼子など純粋なものに対する憧憬を多く描いていることから感じ取ることができる。生涯「よく生きる」ことを願い、真善美を探求し、そこに近づくことができないうちに苦悶しながら、敬虔なクリスチャンとして祈り続けたのが、八木重吉という詩人である。

本稿では、純粋な物として描かれることの多い〈自然〉と〈こども〉に注目し、重吉にとつてのそれらがどういった存在であったか、どのような視点で捉えていたかを考察していく。人間（大人）への嫌悪感、子供や自然へ抱く憧憬の理由を捉えることで、重吉の目指した姿を探ることを目的とする。

第一節 重吉にとつての〈自然〉

重吉は明治三十一年、旧東京府南多摩郡相原の農家に生まれた。重吉が生まれた村は「物理的にも閉鎖的な寒村」⁵⁾ではあったが、後の詩には、心のよりどころとなる温かい故郷の景色が描かれている。

心のくらい日に

ふるさととは祭のようにあかるんでもおもわれる（『貧しき信徒』「故郷」）

ふるさとの山をむねにうつし

ゆうぐれをたのしむ（『貧しき信徒』「ふるさとの山」）

山や川に囲まれたこの土地で、重吉は、鎌倉師範学校への入学に伴い寮生活に入るまでの十四年の歳月を過した。二十九年の生涯のなかで、その期間に形成された人格や心に刻み込まれた原風景が後の人生に与える影響は大きかったことだろう。八木家は仏教を宗旨としていたが、田中によると「家庭のなかでの宗教的雰囲気としては、重吉の幼少時はさほど仏教信仰の深かったというしるしもなく、むしろ当時の農村に生きていた土俗宗教の影響がそのまま日常を支配していた」^①という。自然に囲まれた環境の中で、自然やその命を畏れ敬う心が、ごく普通のものとして育まれていったのだ。

「花と祈りの詩人」と呼ばれ、自然にまつわる詩を多く残した重吉だが、その詩は単に「自然の美しさ」をうたうだけのものではないことが特徴である。

白い 枝

ほそく 痛い 枝

わたしのところに

白い えだ（『秋の瞳』「白い枝」）

実！

ひとつぶの あさがほの 実

さぶしいだらうな、実よ

あ おまへは わたしぢやなかつたのかえ（『秋の瞳』「草の実」）

『秋の瞳』に収録されたこれらの詩の詩をはじめ、『秋の瞳』に収録された多くの詩は、自然に自己を投影し同一化し

ているような視点で描かれている。このことに関して、中山幸久は

『秋の瞳』の中では外界と内面との境界が見失われ、自然の事物の描写がそのまま詩人の内面描写へと転化していくといったことがしばしば見受けられる。(中略) こうしたことは、総じて『秋の瞳』の中で描かれた自然が観念的に捉えられたものであることや、この時期の重吉の関心がひたすら自己の内面へと向けられていたことにより、詩の制作にあたって、単純に外界のみを描くことに自足出来なかつたことなどに起因するものと考えられる。⁷⁾

と論じている。一見自然を歌っているものでも、重吉が見つめていたのは自然そのものではなく自分自身であった。後期に書かれた『貧しき信徒』になると、内面的なものだけではなく、比較的客観的な視点にすりかわっていくが、これも「この時期にいたって、重吉は明確に外界と向き合い、自然の有り様を描き始めた」⁸⁾ためである。外界と向き合い始めたきっかけとしても、兵庫県御影師範学校から千葉県東葛飾中学校への転勤を機に、自然の風景が多く残されていた千葉県の柏に移住したことが考えられる。柏に移って最初に書いた詩稿の中で「じつはだれにもあひたくなかつた／この林とこのむぎばたけと／むねをすいとるこの空がみたかつたのだ／ほんとうはそれだけであつた」(大正十四・四「桐の疎林」)と告白しているように、故郷を彷彿させる自然は、人間関係に疲れた重吉の心を癒したことだろう。

このように、自然との向き合い方は、重吉の心の様子を反映するものだった。重吉にとつての自然について、藤原定は「重吉は人間関係において充分には満たされなかつた愛や友情を、そんなふう自然との内的な交渉によつて満たした」⁹⁾としている。

しかし、時に自己と同一化するほど身近な存在である自然も、重吉にとつては決して自分と対等なものではなかつた。

こんな草なんか

なぜ人間は羨ましいのだろう

ほかの者の云うことなど少しも気にかけて
力いっぱい生きているせいだろうか（大正十五・二「欠題詩群」〔草〕）

はつ夏の

さむいひかげに田圃がある

そのまわりに

ちさい ながれがある

草が 水のそばにはえてる

みいんな

いいかたがたばかりだ

わたしみたいなものは

顔がなくなるようなきがした（『貧しき信徒』「水や草は いい方方である」）

重吉のうたう自然は、神格化された大いなるものではない。重吉が「みんないい方々だ」と言うその水は「ちさいながれ」であり、恐らく草も道の傍に生える名もない雑草だろう。ここからは、重吉が抱いていたのが、大いなる自然への讚美ではなく、健気な命への尊敬であったことが感じ取れる。

なにゆえ

草はうつくしきか

みずからのすべて

みずからによりてつくられしゆえなり

なにゆえ

にんげんはうつくしからぬか

みずからならぬもの

みずからのうちにあるゆえなり

いつぼんのくさのうるわしさは

ひとつのほのおのうるわしにかよう

くさの葉の

そのかたちは

つくりぬしの

こころながるる そのすがたなり (大正十三・十「欠題詩群(二)」)

これが、自然の持つ美しさの理由である。「くさの葉のそのかたち」は創造主である神の心を反映した本来の姿であり、「みずからのすべて／みずからによりて」完結する姿は、混じりけがなく純粹であるというのが重吉の考えであった。そしてその一方で、今高義也が「人間の場面には、被造物本来の「みずから」以外の〈夾雑物〉——すなわち自我——があるゆえに美しくあることができない。重吉は、〈自然〉と交流しその美に触れることによつて、自我にとらわれた心の〈浄化〉をもとめていた」¹⁰⁾としたように、次第に神に創られた姿から遠ざかり、混じりけのないままではいられなくなるために、重吉にとつて人間は「うつくしからぬ」ものとなつたのだ。

その言葉の通り、重吉が「水や草は いい方方である」と言うとき、「わたしみたいなものは／顔がなくなるような

きが「する程の引け目を感じており、草を「ほかの者の云うことなど少しも気にかげず／力いっぱい生きている」と言うとき、そうでない人間に対する批判が感じられる。これらから分かることは、藤原が「人間であることに多少の後ろめたさを抱いて彼は草木を「羨ましい」と思うのだ」「二と言う通り、単に草木を「羨ましい」と思っただけでなく、人間に後ろめたさを感じていたことだ。そしてこの感情は、次のような形になって作品に表れていく。

できることなら

くだものさえ殺さずにいきたい（大正十四・六「論理は熔ける」）

えんぜるになりたい

花になりたい（『秋の瞳』「花になりたい」）

これらの詩からやさしさを感じる人は多いだろう。シンプルな言葉で書かれた純粹無垢な願望からは、聖人君子のよ
うな人物を想像させられる。しかし、

のみを一匹つぶすときでも

これで気がたしかだとはおもわぬ（大正十四・六「論理は熔ける」）

一見して優しげに感じられる、小さな命を大切にする眼差しは厳しさを増し、食事を用意する妻の姿にも残酷さを見出し始める。

「女」といふものは

ふしぎなものだ

いわしのすりみをつくとて

ごりごりいわしを すりばちでつぶしている、

なむあみだぶつ

なむあみだぶつ、

だが この世に生くるからには

こうした

「女」がつれだちでなければゆけない（大正十三・十一「純情を慕いて」）

重吉は「私の幻滅」と名付けられた詩の中で、「なにゆえに／わたしは妻に幻滅をかんじるか、／わたしの妻もにんげんであつて／はなをかみ べんじよへゆき／天使そのものではなかつたゆえに（後略）」（大正十三・十一「寂寥三味」と語っているが、この詩にはそういった心の動きが、より具体的に表れている。熱烈な求愛の末に「あなたは天使です」とまで言つた最愛の妻の姿にも生身の人間の残酷さを見いだし、「天使そのもの」ではなく普通の人間であつたことに「幻滅」する厳しさに驚かされる。この独自の視点は、小さな命を大切にする幼い頃からの氣質が思想的に純化されたものであると言えよう。

重吉は、人間が持つこうした残酷さを見逃すことができなかつた。それは、登美子の回想の中での「八木は一心に詩作に打ち込む一方、きびしい真剣な求道をつづけていた。あるときなど、いきなり私にむかつて「お前は罪ふかい、舌を噛んで死んでしまえ」とつきつめた顔をしていうことがあり、そのときは私もただ茫然とするばかりであつた。」^[1]というエピソードにも表れているように、許しがたい程強いものとして重吉の中に根付いていた。そんな中での「完いものをあへぎもとめるわたしのひとみには／どんなものでも不完全にみえるのです」（大正十三・十一「純情を慕ひて」という告白は、妻及び現実世界に感じた失望を、端的に表していると言える。そして、ある日ふと気付いたかのように、

「ひよつとすると（人間）は（出来損ない）じゃあるまいか？」（「断章」）と呟くのだ。この感情について藤原は「日常茶飯の誰でもがしているきわめてありふれた事柄に、彼はいつまでも幼児のような初心の感動を持たないではいられず、果物を食べたり、蚤をつぶしたり、妻君が鯛のすりみを作ったりするのも心も傷めずにはいられない。（略）われわれはそういう口実の網を張りめぐらして良心を封じ込めているのだが、重吉からすればそれは大人の醜さである」¹³とされている。幼い子供なら「可哀そう」と言うであろう行為を、「口実の網を張りめぐらして良心を封じ込め」ることで平然とやつてのける妻の姿、重吉はそこに偽りやごまかしの世界を見て、「大人の醜さ」を感じたのだ。そして、この「大人の醜さ」とは対極の位置にあり、その世界から脱却するために彼が求めたのが、〈こども〉の世界であった。

第二節 こどもの世界

こどもは

なぜ えらいかといへば

天国にちかくいるからだ

じつさい

えんぜるがじきそばにあそんでる

うそではない

おとなとは せかいがちがふ

ものがみんな溶けているせかいだ（大正十三・六 ●詩● 鞠とぶりきの独楽）「こども」

この詩には、重吉の子供に対する考えが明確に示されている。「おとなとは せかいがちがふ」と言い切った詩人に

とつての〈ごども〉について、少し考えていきたい。

桃子は

おちいたば！

おちいたば！

そういつて お月さんにむちゆうだ

ほんとうにうれしそうだ

ほんとうにうれしいのだろうか

もしそうなら

わたしは

どんなものもなげだして

桃子の眸がほしい（大正十四・六「ことば」）

「ほんとうにうれしそうだ／ほんとうにうれしいのだろうか」と問いかけるところは、ありのままではいられなくなつた自分に対する失意を綴つた、「うれしい」といへば、／「かなしい」といへば、／ほんとうにうれしかった／かなしかった／あの頃はもうかへられないのか——」（大正十・十一・六）という日記の一節を彷彿させる。夾雑物に左右されず、感じたことに忠実である姿勢は、重吉にとつての大きな望みであった。

桃子の眼はすんで

まっすぐにものを視る

羨ましくつてしかたが無い（大正十四・六「ことば」「子供の眼」）

そんな重吉にとつて、子供の無心の眼差し程、心惹かれるものはなかった。重吉は同じくキリスト教者である山村暮鳥の詩に親しんでおり、御影時代の教え子にも「山村暮鳥さんの雲は逸品です」と語っていたというが、子供の眼に神聖さを見出す感覚は、暮鳥の「雲」に収録される「病床の詩」に共通するものがある。

よくよくみると

その瞳の中には

黄金の小さな阿弥陀様が

ちらちらうつっているようだ

玲子よ

千草よ

とうちゃんと呼んでくれるか

自分は恥じる（山村暮鳥『雲』「病床の詩」¹¹）

これらの詩を貫いているのは、ごまかしの一切効かない神聖な目の前で、羨ましさを感じると共に自らを恥じる詩人の心である。それは、聖書にある「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」（「マタイによる福音書」十八章・三節）という考えが拠り所となっているのではないだろうか。

この膝にたわむれる児よ

ひとつの

鮮やかな世界にすむお前の眼は

この世界は浅はかだとわたしにつげる（大正十五・一「野火」「游心」）

中山は「幼児の世界を認識することが、自己を含めた大人たちの世界の在りようを自省させ、その軽薄さを痛感させる」と分析しているが、罪深い自分との対比から目指すべき命の有り様を探るこの視点は、重吉の詩の根底をなすものである。

では、重吉が美しさを見た「ものがみんな溶けている」「鮮やかな世界」とは、一体どのようなものなのだろうか。

桃子は

金魚のことを「ちんとん」といふ

ほんものの金魚より

もつと金魚らしくいふ（大正十四・六「ことば」「金魚」）

もも子は

まりのことを

「いやあ ぼん」といふ

なんだか

ほんものの鞠より

もつと鞠らしい（大正十三・六●詩●鞠とぶりきの独楽」「鞠」）

多くのものは名前をつけられ部類分けされているが、金魚を「ちんとん」と呼んだり、鞠を「いやあ ぼん」と呼んだり、幼い子供にはその区別がない。重吉が子供の世界を「ものがみんな溶けているせかい」と呼んだ由来が、こ

こにある。中山はこれを「子供は（中略）桜や豚といった生きものと同様に、ある時期までは自意識を持たない。それゆえ、主客の分離する以前の世界に住んでいる。このような子供の目に映る自他の区別の無い、無差異の世界を「ものがみんな熔けているせかい」と呼んでいるのだろう」¹⁶と説明している。偽りやごまかしから生じる大人の醜さを忌み嫌った重吉は、良くも悪くも区別のない子供の世界に美しさを見たのだった。重要なことは、現実の「浅はかな世界」と対比される「鮮やかな世界」に存在するのは、〈善〉だけではないということである。藤原は「彼にとってこの大人の悪を補償するものは、子供の世界と自然であった。（中略）彼の人間観は大人のみにくさに対する子供の一念・無邪気・天使的なものという相反形態によって行われた」¹⁷と論じているが、幼い子供は全ての物に命があると感じ、食される魚や動物を哀れに感じる一方で、蟻の足や花弁をむしったりする残酷さも持ち合わせている。大人になると、その矛盾や二面性に気付きながらも、「口実の網を張りめぐらして良心を封じ込め」¹⁸、取り繕うようになるのだが、重吉は、そうした善と悪の共存こそが人間の本質であり、あるべき姿であると考えたのだろう。そして、それをごまかす姿に「大人の醜さ」を感じた結果、世俗の道徳や倫理観にとらわれない、主客の分離も善悪もない自然や子供の世界に向かったのだ。その考えは、詩集『貧しき信徒』において並べて配置されている、

人を殺すような詩はないか（『貧しき信徒』「無題」）

息吹き返させる詩はないか（『貧しき信徒』「無題」）

の二編にも、顕著に表れている。

また重吉は、自然と同様に純粹である子供は神や天国に近い存在であるという考えを持っていた。先に挙げた「子ども」の中でも、「子どもは／なげ えらいかといへば／天国にちかくいるからだ／じつさい／えんぜるがじきそばにあそんでる」と記している。それは、「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国

「はこのような者たちのものである」（「マタイによる福音書」十九章・十四節）という聖書の考えに起因しているのではないだろうか。

ただしその一方で重吉は、自分は既にその世界の住人ではないことを自覚していた。

笑ったり

泣いたり

ころころと桃子は遊んでいる

お前の世界は巾がひろく

厚みがあつて光っている

お父ちゃんにはそれがわかつて

お前のいるところへは飛びこめないよ（大正十五・一「野火」）

現実世界に長く居た人間では、その世界に飛び込むことを諦めざるをえなかった。しかし、

てくてくと

こどものほうへ もどつてゆこう（大正十三・六「●詩● 鞆とぶりの独楽」〔鞆〕）

純粋な世界の認識を通して自省し、目指すべき命の有り様を探求し続けた詩人は、「飛びこむ」ことは出来なくとも「てくてくと」段階的にならぬ「もどつてゆこう」と言ったのである。そして、そういった意識の中で、知人への手紙で「私は自分の究極においては、子供のような詩をのぞんでいる。だがそれは五十を越してからのことだろう」¹⁹と語った重吉の詩は、次第にひらがなを多用した簡素な表現へと変化していく。こうしたことから、生涯貫かれた重吉の強

い探究心や、一途な姿勢を感じ取ることができるだろう。

終りに

素朴な言葉で書かれたひたむきな祈り。八木重吉の詩は、その繊細で優しい響きが評価されているといっても過言ではない。しかしそれは、単なる優しさから生まれたものではなく、人間への厳しい批判の表れであった。重吉は、偽りやごまかしを孕んだ人間の本質に「大人の醜さ」を見いだし、それを指摘する厳しい視線を常に絶やさなかった。詩人は人間に対するそうした失望から、「えんぜるになりたい／花になりたい」（『秋の瞳』「花になりたい」と言ったのだ。重吉が「なりたい」と言ったそれは、夾雑物に左右されることなく「みずからのすべて／みずからによりて」完結する〈自然〉であり、世俗の道徳や倫理観にとらわれず、主客の分離も善悪もない「ものがみんな溶けているせかい」に住む〈こども〉であった。そこは、完全な〈善〉だけの世界ではない。しかし、神に創られたままの姿であることを望み、本来誰しもが持つている矛盾や二面性を把握した重吉は、そうした世界に純粹さを見いだし、強い憧れを抱いた。そして、子供の純粹さに憧れながらも、違う世界に住んでいるのだという自覚を持った上で、「てくてくと」段階的にでも「こどものほうへ もどつてゆこう」（大正十三・六）●詩● 鞠とぶりきの独楽」「鞠」と決意したのであった。及ばざる自分に苦悩しながらも、生涯「よく生きる」ことを願い、祈り続けた詩人・八木重吉。純粹さに立ち戻る道を模索するその心の動きこそ、重吉が辿りついた信仰の形だったのでないだろうか。

〈注一覽〉

〔1〕『花と空と祈り 八木重吉詩稿』弥生書房 昭和三十四・十二

〔2〕〔1〕に同じ。

〔3〕草野心平「八木重吉のこと」『詩と詩人』和光社 昭和二十九・六

- [4] 『増補改訂版新潮日本文学辞典』（重吉貞解説：草野心平）新潮社 昭和六十三・一
- [5] 田中清光 『詩人八木重吉』 麦書房 昭和四十四・十
- [6] [5] に同じ。
- [7] 中山幸久 「八木重吉『貧しき信徒』論」 『緑岡詞林』十八 平成六・三 引用は『国文学年次別論文集V・平成六年』（学術文献刊行会）による。
- [8] [7] に同じ。
- [9] 藤原定 『詩の宇宙』 皆美社 昭和四十七・九
- [10] 今高義也 『八木重吉とキリスト教・詩心と「神学」のあいだ』 教文館 平成十五・一
- [11] [9] に同じ。
- [12] 吉野登美子 『琴はしすかに』 弥生書房 昭和五十一・十
- [13] [9] に同じ。
- [14] 山村暮鳥 『雲』 イデア書院 大正十四年・一 引用は『山村暮鳥全集一』 筑摩書房 平成元・六による。
- [15] [7] に同じ。
- [16] [7] に同じ。
- [17] [9] に同じ。
- [18] [9] に同じ。
- [19] 四竈経夫 『八木重吉・詩の祈り』 宝文館 平成元・七

*テキストは『八木重吉全集』（全三巻 筑摩書房 昭和五十七・九、十二）を用いた。引用の表記はテキストのままである。ただし、旧字体は新字体に改め、文中に詩を引用する場合は改行を「
」で代用した。なお、刊期は元号に統一した。